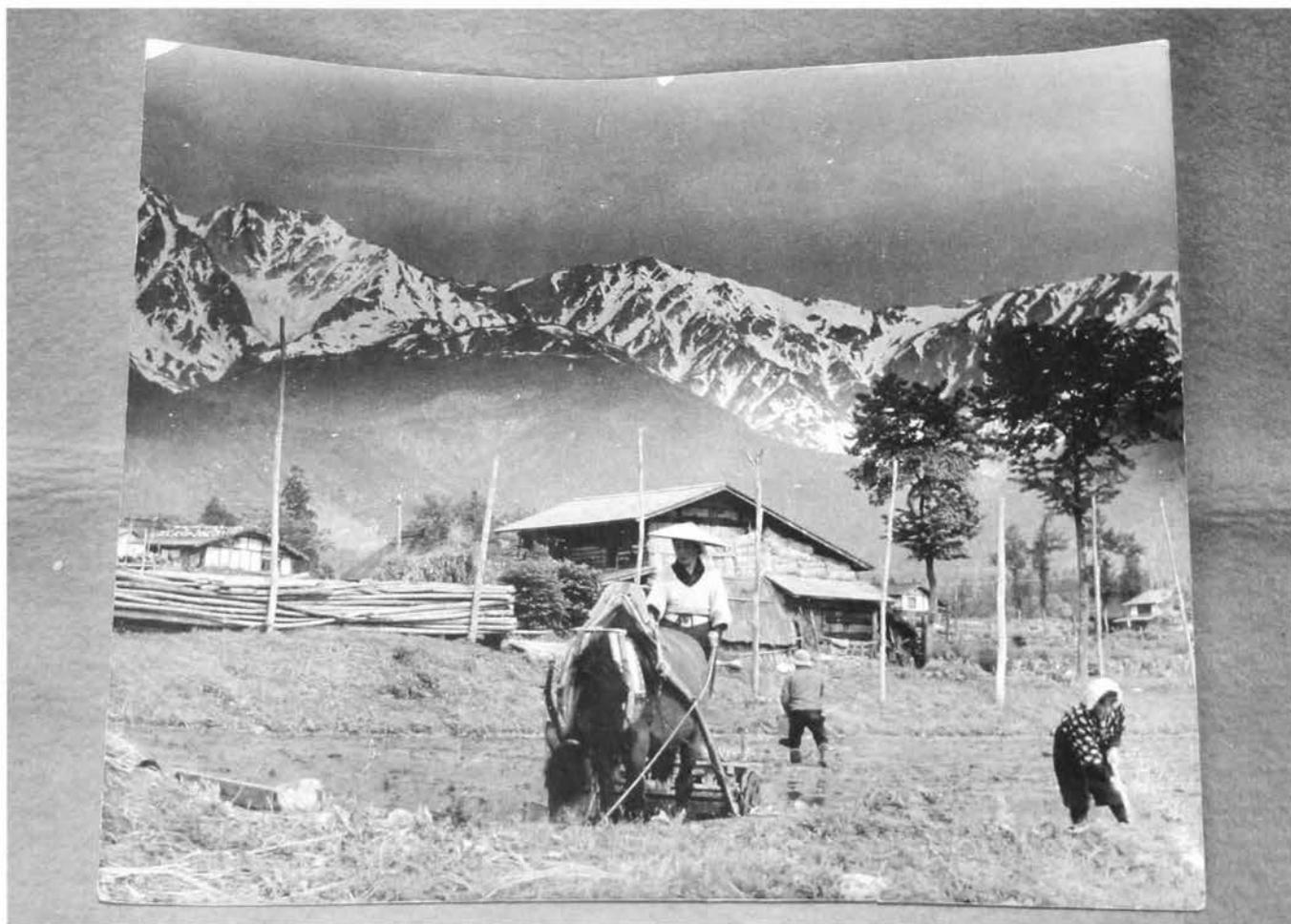


山と博物館

第53巻 第3号 2008年3月25日

市立大町山岳博物館



代かきのころ

宮野典夫

昭和三十九年に発刊された「日本百名山」で深田久弥は白馬岳について次のように述べている。

「代馬岳という名の起ころは、山の一角に、残雪の消えた跡が馬の形になって現れるからであった。田植にかかる前の苗代掻をする頃の馬が見え始めるので、苗代馬の意味で代馬と呼んだという。もう二十数年前、私の友人田辺和雄君が五月下旬、山麓へ行って、古老の話を聞き、その馬の形をつきとめてカメラに収めてきた。それは主峰よりずっと右に寄った小蓮華岳の右肩のはずれの残雪の中にあつた。小さな地肌の黒馬であつた。」

昭和三年五月、当館の学芸員であつた海川庄一さんは深田久弥が記したとおりの構図でシャッターをきっている。「山と博物館」の第一巻五号（昭和四六年発行）の表紙にもなつたこの写真を四月一二日から開催される企画展「雪形―山麓の民俗―」に使用しようと考え、原画を持ち出したが、かなり使いこんだ形跡があり、折傷はないものの、表面はでこぼこになっていて、裏にはサイズ指定の数字が記してあつた。

農業技術や農機具の発展により、稲作における作業手順や時期は様変わりしてきた。現在は「代かき」はトラクターがほとんどで、耕運機さえ目にするのがなくなってきた。あちこちの田んぼでトラクターが「代かき」するころ、まだ「代かき馬」の姿はしっかり現れていない。「代かき馬」がちょうどいい姿になつたころには田植え機で植えられた苗が田んぼに並んでいる。

（市立大町山岳博物館）

雪形 — 山麓の民俗 —

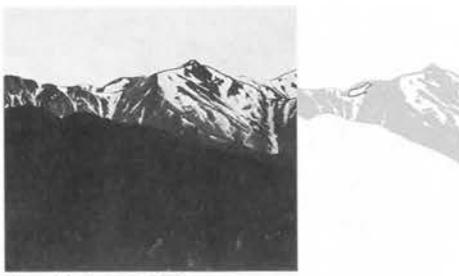
宮野典夫

はじめに
雪形(ゆきがた)は雪解けが始まると、残雪と山肌が織りなす紋様を、物や動物などになぞらえてきたものである。

それは生活の中から生まれたものや、遠い視線の楽しみとして伝承されてきた。雪形が山の名前の由来になったり、季節の歳時記として話題にもなっている。

雪形の多くは四月から五月が見ごろで、身近な道具などからの発想でつけられた雪形の名前も、その物が、今では身近なものではなくなり、農事からつけられた雪形は古い時代の農作業を顧みることも必要である。雪形に現れる物を中心に伝統的な伝承を紹介する。

東天井岳の「仔犬」



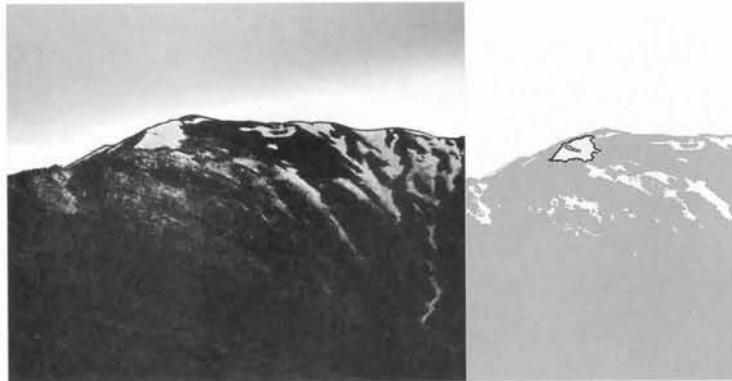
東天井岳の「仔犬」
出現場所：東天井岳から横通岳へ向かう鞍部
見ごろ：6月上旬～下旬

「仔犬」の手前にある稜線の鞍部を窓越しに見ることができ、いので、数ある雪形の中でも、この雪形を見られる場所に限られていて、また、出現の時期

が梅雨の最中でもあり、雪形を追い求めた田淵行男氏でも決定的なチャンスをつかむのは難しかったようである。

蝶ヶ岳の「蝶」

大正時代に発表された「安曇節」には北アルプスの情景を歌いこんだ歌詞が多く、その中に「里に菜種の咲く頃は、宙に浮き出す蝶が岳」とある。



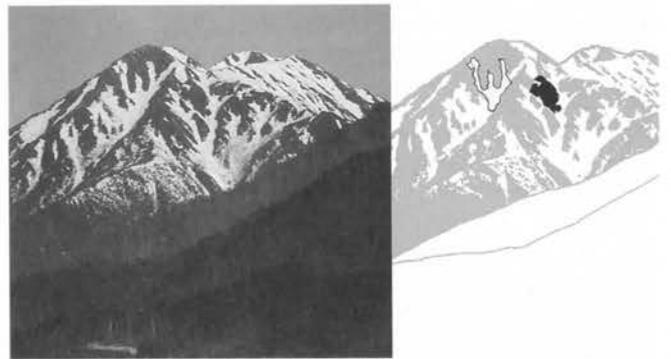
蝶ヶ岳の「蝶」
出現場所：蝶ヶ岳山荘の南約600mのお花畑
見ごろ：5月上旬～6月上旬

常念岳の常念坊と万能鋤
常念坊が開いた山であるといわれている。雪形は袈裟をまとった僧が合唱している姿に現れる。



万能鋤での代かき作業(撮影年月日不詳)

万能鋤は田畑を耕す農具である。北アルプス山麓の扇状地は石が多



常念岳の「万能鋤」(左)と「常念坊」(右)
出現場所：前常念岳の東面、山頂下
見ごろ：常念坊は3月下旬～4月中旬、
万能鋤は5月中旬～5月下旬

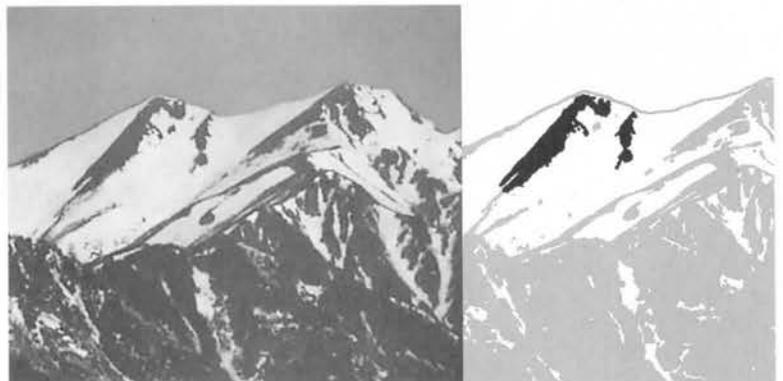
くて普通の鋤では耕しにくく、三本刃の万能鋤が使用された。

爺ヶ岳の「種まき爺さん」

爺ヶ岳には大町市街地方面から見える「爺さん」と安曇野市方面から見える「爺さん」の二人の雪形が現れる。

三月中旬ころから堆肥の切り返しをはじめ、スジ(種籾)の用意をする。文化五年(一八〇八)から明治三三年(一九〇〇)までの常盤地区の記録ではこの間に五一品種もの稲を栽培していたようである。

種籾の用意が整う五月上旬には苗代の準備にとりかかった。苗代はネーマ、ナガシロ、



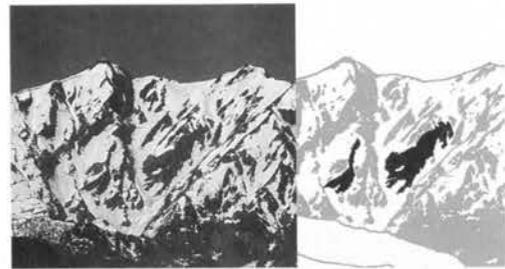
爺ヶ岳の「種まき爺さん」
出現場所：爺ヶ岳南峰と中峰の間・南峰からの尾根
見ごろ：4月中旬～5月上旬



種まきの様子(撮影年月日不詳)

ナエシロ、ナエマなどと呼ばれていた。種を播く日は緑起のよい日を選んで、低温の目を避けた。一家の主人が播くとき、若い嫁が播くと発芽がいかか、朝飯前に播くことにしているとかの言い伝えもある。播き方はざるに繩を十文字にかけその中に種籾を入れて、すくいあげて手の指の間からこぼすように播いたが、平均に播くには年季のいる作業であった。

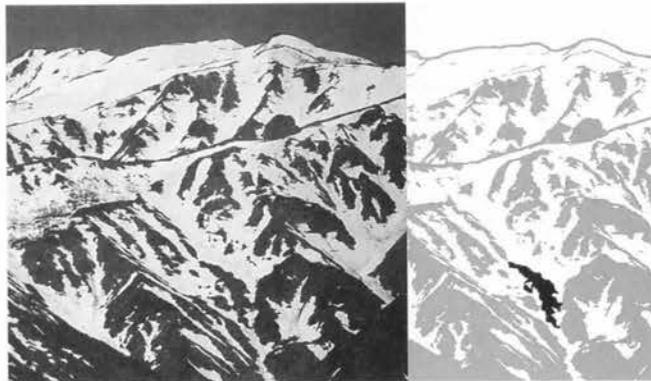
人が播くとか、若い嫁が播くと発芽がいかか、朝飯前に播くことにしているとかの言い伝えもある。播き方はざるに繩を十文字にかけその中に種籾を入れて、すくいあげて手の指の間からこぼすように播いたが、平均に播くには年季のいる作業であった。



鹿島槍ヶ岳の「ツル」と「シシ」
出現場所：南峰と北峰の間
見ごろ：4月～5月



手斧(藤岡建設所有)



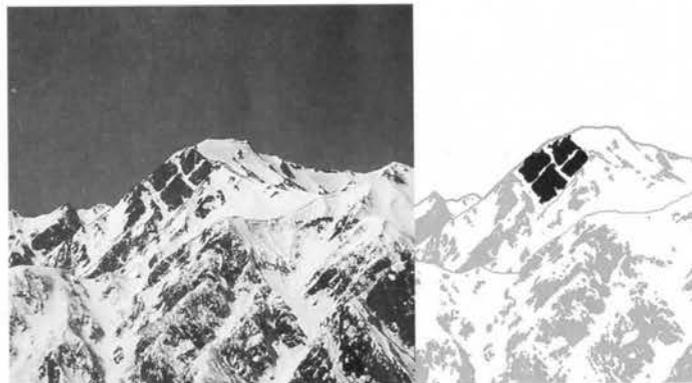
八方尾根の「手斧」
出現場所：八方山から南にのびる尾根の下方
見ごろ：5月上旬

ンターでの作業となってきた。
鹿島槍ヶ岳の「ツル」と「シシ」
上リツル、下リシシとも言われている。急峻な岸壁がその姿になるため、雪形の中でもはつきりした形で見える期間が長く、新雪時に現れたり、冬季でも確認することができる。
八方尾根の「手斧打ち」
八方尾根に現れる「手斧打ち」は左を向いていた。



武田家の家紋「武田菱」

武田信玄の家紋である武田菱にそっくりの雪形が現れる。この雪形は四つの菱形が明瞭に見える期間が短期間である。室町時代に当地



五龍岳の「御菱」(「武田菱」、「割菱」ともいう)
出現場所：五龍岳山頂下
見ごろ：4月上旬

た人物が手斧を持って作業をしている姿に表れる。
「手斧」は「ちような」と読む。手斧は大工道具の一つで、材木を平らにするために荒削りをするものである。
五龍岳の「御菱」



白馬岳の「代かき馬」
出現場所：三国境の下方
見ごろ：5月上旬

を治めていた仁科氏は北安曇郡、南安曇郡の北部を領域とし、強盛時には新潟県西頸城郡や上水群の一部までを領域としていた。仁科氏は武田家に滅ぼされ、名族仁科氏の後継者は途絶えが、武田信玄の五男盛信が仁科五郎盛信として仁科氏の名称を継いでいる。
白馬岳の「代かき馬」
躍動感あふれる馬の雪形は白い馬ではなく、黒い馬である。
代かきとは田植えのできるように土をやわらかくすると同時にコヤシ(肥料)を土中にすきこむ作業である。
コヤシは堆肥、骨粉、カリシキ、れんげ、石灰などであった。カリシキ(カルシキ)と

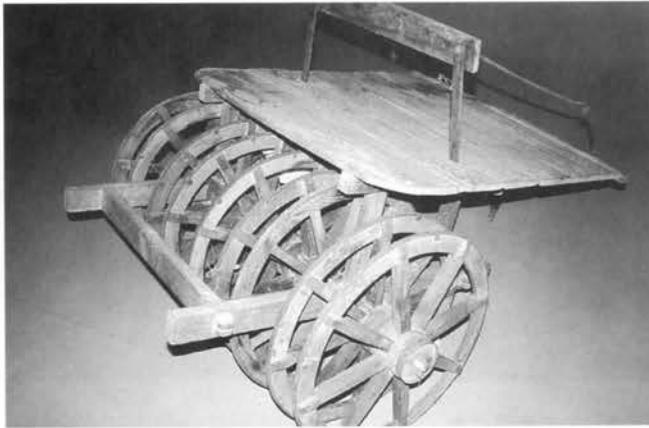


代かき車(コンベト) 昭和30年代まで大町市常盤で使用



代かきの作業(撮影年月日不詳)

は山に自生している青草を刈り取って水田にまき肥料とするものである。カリシキは田んぼ一面に敷き詰め、その上に石灰をまき、馬を歩かせて踏み込み、さらに馬に引かせたコンベト(車輪に馬蹄形の突起がついたもの)で踏んだ、これをアラジロともいう。次にシログルマ(車輪がならんでいるもので十三車とも呼ばれていた)を馬に引かせて仕上げをした。これをウエジロともいう。最終の仕上げには長い丸太などをシログルマの後ろに結わえて引きずったり、エブリという道具を押したり引いたりして水田を平らにして田植えができるようにした。



代かき車(十三車) 昭和30年代まで大町市大町で使用

らも遠望できる
「岩嫁」は乗鞍岳と小蓮華山の鞍部に現れるが、この雪形を樂しむには小谷村梅池高原の一角に立つと歪みがなく、結婚式の場面が現れる。
「仔馬」は小蓮華山への雷鳥坂あたりの下に左を向いた格好で現れる。志村鳥嶺、平林武夫両氏はこの馬が代馬であると述べている。

「種まき爺さん」は仔馬の左下方に笠をかぶった姿で現れる。
小蓮華山の左下方に現れる「種まき爺さん」と、その右の小さい人形が応援に駆けつけた「婆さん」である。

参考文献

志村鳥嶺・平林武夫

一九五八 山と博物館

長沢 武

一九七七 北アルプス夜

話 信濃路

田淵 行男

一九八一

上条 為人

一九八四

荒井和比呂

一九八五

大町市

大町市史第二巻原始・古代・中世

大町市

※写真はいずれも山岳博物館資料

(山岳博物館副館長)



左から「種まき爺さん」「婆さん」、「種まき爺さん」、「仔馬」、「嫁岩(嫁菱ともいう)」、「鶏」

山と博物館 第53巻 第3号
発行 二〇〇八年三月二十五日発行
〒388-0002 長野県大町市大町八〇五六―一
市立大町山岳博物館
TEL 〇二六―二二―〇一一一
FAX 〇二六―二二―二二二二
E-mail:sanpakku@city.omachi.nagano.jp
URL:http://www.city.omachi.nagano.jp/sanpakku/
印刷 株 奥村印刷
定価 年額 一、五〇〇円(送料含む)(切手不可)
郵便振替口座番号 〇〇五四〇一七―一三一九三



この「山と博物館」は再生紙を使用し、石油溶剤の代わりに大豆油を使用した大豆インキで印刷しています。